2005. 9. 30.

おーい図書館

No.105

発行 おーい図書館
代表 青木 和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL 047-311-0886

図書館問題研究会（略称：図問研）

報告 青木 和子

7月3日(日)～5日(火) 群馬県高崎市で、第52回全国大会が開催されました。

3日は、全体会とシンポジウム。シンポジウムは、「図書館づくり、人づくり、まちづくり、そして、世界へ」のテーマでのパネル・ディスカッション。

4日は、分科会。

①あらためて公共性を問う
②図書館は自治体再編を超えられるか
③「図書館評価」に取り組もう！
④図書館のある幸せを伝えたい …群馬編
⑤住民の権利としての図書館
⑥子どもと本をむすぶ環境をつくろう
⑦一人一人を大切にする図書館サービスを―図書館利用に障害のある人々へ―
⑧選書が変われば、図書館が変わる
⑨図書館と危機・安全管理
⑩住民の期待する図書館員と「図問研」

4日夜は、テーマ別交流会。

○「憲法・平和・図書館」の集い
○ワークショップ「赤木かんこさんの製本教室」
○テーマ配架による「必要な人に情報を届ける」モデル提言～都立中央図書館「闘病記文庫」開設を事例として～ など。

5日は、しめくくりの全体会。

「図問研」は、1955年結成の「住民の学習権と知る自由を保障する図書館の発展を目指して活動している個人加盟の団体」です。

図問研全国大会は、全国の図書館関係者および市民が、一堂に会して、図書館に関わる様々な事柄を話し合い、問題解決の糸口を掴もうと知恵を出し合う場です。

参加者の図書館にかける思いの深さ・強さを肌で感じ、大変心強く思うと共に、やはりどこでもさし迫った問題として「指定管理者制度」に頭を悩ましていることを実感しました。各地で図書館員や市民が、試行錯誤しながら対処し闘っている様子が報告されました。

本来ならば、より良い図書館を

目指しての実践報告の場であるべき会です。ところが、どう考えても図書館にはなじまない「指定管理者制度」という問題に振り回されねばならない現在の状況を、非常に嘆かわしく思いました。

そのような中でも、滋賀県東近江市立永源寺図書館長の巽照子さんをはじめとして素晴らしい図書館人にお会いする機会を得、貴重なお話を伺えたことは、大きな収穫でした。

滋賀県では、1978年に知事に就任した武村正義さん（元さきがけ代表・衆議院議員）が県全体の図書館改革に着手。1980年、日野市の図書館長だった前川恒雄さんを県立図書館長に迎えたことによって、素晴らしい図書館が次々と生まれていきました。以前は全国最下位だった県民一人あたりの公立図書館の貸出し冊数が、2002年には東京都を追い越して第一位になりました。

実力と情熱を兼備えた図書館員とビジョンを持った首長、そして市民が力を合わせれば夢は実現する、ということを教えていただきました。

少々遠いのですが、永源寺図書館など滋賀県内の図書館をいつか訪ねてみたいという、楽しい夢もいただきました。

親子読書地域文庫全国連絡会

7月24日(日)・25日(月)、埼玉県嵐山町「ヌエック」（国立女性教育会館）で、第15回全国交流会が開かれました。

24日は、基調報告（広瀬恒子代表）と講演会（児童文学作家あさのあつこさん）。

25日は、分科会。

①絵本と読みきかせ
②子どもにおはなしを
③読書ボランティアのいま、これから
④豊かな学校図書館を求めて
⑤公共図書館の現状と課題
⑥平和―わたしたちには関係ないことか―

分科会「読書ボランティアのいま、これから」に参加して

吉原　里絵

分科会では、現在「読書ボランティア」として活動している人たちの現状・問題点について、活発な意見が出されていた。

例えば、行政は、募集したものの現場では受け入れ体制ができていないので、すべてボランティアに任せてしまう、ボランティアは応募したけれど、子どもの本を読んだことがなく、自分の朗読の聴

要を求めている、など。

ボランティアとは自主・自発が前提のはずが、公立小中学校・保育所など「行政の場」で「行政主導」で行われる以上、自主・自発は矮少化してしまう。だからこその現況・問題点であると感じた。

また、学校図書館の充実を望む私としては、現在の人材不足の現状で「読書ボランティア」が入ることで問題がより深刻になることも気になった。

とは言え現実には、文部科学省をはじめ、行政によるボランティア活用の流れはこれからも広がっていくようなので、私がどうなっていってほしいかを書くと、

教員がボランティアを「生きた教材」として、日頃の教育活動の中の一部として位置づけ活用する。

ボランティアも自分の存在を「教材」とわきまえて現場に入っていく、時には受け入れ体制が整っていなければ拒否する選択もする。

その前提としては、分科会でも提示されていたが、行政と市民の連絡体制の確立、松戸の「子どもの本ネットワーク」の平さんの目指すボランティア間のネットワークも必要になる。これらが機能すれば、地域に開かれた教育活動という教育委員会が望むような言葉が現実になる。

そしてボランティアは活用されるばかりではなく、「読書」とつくからには、学校図書館の拡充の機会ととらえて、粘り強くしたたかに運動していきたい。行政の企てに乗ったと見せて、市民の要求を通すような戦略あるボランティアを望む。

余録

（2005年9月6日毎日新聞より）

「自殺したくなったら、図書館へ行こう」。京都の出版社「論創社」代表、宮賀宗博さん(49)は、心が沈んでいる友人たちに会うと、そう言い続けている。7年前、滋賀県の能登川町立図書館を訪れたのがきっかけだ。

館内は天井が高く、そこには何枚ものタペストリーが雲のようにたなびき、ゆったりと風が流れているようだった。畳のへやがあり、お茶も飲める。書架の間にあるイスに座ると、他者の視線が消え、居心地がいい。公共の空間だが、誰もが独りになれる「居場所」がある。

「死角が多く、あえて目が届かないところが多いように設計している」と松津原哲弘館長(58)は語る。「図書館はよりよく考え、生きるための場です。行き場のない人、ケン力しても穏れる場所がない人

たちを孤立させず、自殺させない。それも図書館の役割です」

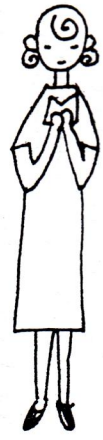
昨年の自殺者数は、7年連続で3万人台を記録した。インターネットで知り合った若い男女が、車の中で練炭などで集団死する「ネット自殺」が急増している。警察庁の集計で昨年は前年より21人増の55人に上り、今年は4月末までで59人とすでに昨年を上回った。インターネットと練炭とは実に奇妙な組み合わせだ。

オタマジャクシは、水槽に入れたままにしていると、ほとんどがカエルになる前に死んでしまう。だけど、そこに小石や小枝をちょっと置けば、ひと呼吸でき、うまくカエルになれるそうだ。そんな小石や小枝のような「居場所」が今、社会から減っているのだろうか。

図書館が、人々が多忙な日常から離れ、ゆっくりできる空間になればいい。美しい織物が掲げられ、風に揺れている図書館なんて、想像するだけでうれしくなる。そんな「居場所」を町のあちこちに増やしていきたい。

（注）中賀さんの「自殺したくなったら図書館に行こう」は世界8月号に掲載されています

（2005年9月4日東京新聞より）



子どもたちの未来と図書館

常世田 良（ときよた りょう）

今年の夏休みも、多くの公立図書館は子どもたちの姿で満ちあふれました。彼らを待つ未来は、どんなものでしょうか。

地方の農家がインターネットを通じて東欧の農家と直接取引する時代です。世界規模の変化を反映して国内の価値観も多様化し、社会の仕組みも複雑高度化します。これまでのように、指示された学習や仕事を決まりきったやり方で無難にこなせば評価される時代は終わりを告げようとしています。

情報リテラシー能力という概念があります。ユネスコはこの能力を持つ人間を、自ら「情報を、評価し組織化し、効果的に用いることで個人的な問題や仕事にかかわる問題、そして広い意味で言えば社会問題に取り組み、解決の助けになれる」人としています。これから必要とされる能力はこのようなものではないでしょうか。

日本の成績順位が大きく後退して、ゆとり教育の見直し論議まで引き起こした経済協力開発機構（OECD）の「生徒の学習到達度調査」も、日本の学力調査のように、獲得された知識量を測定する調査ではありません。たとえば「読解力」では「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、熟考する能力」（国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能2　OECD生徒の学習到達度調査』）としています。

同調査の読解力で一位だったフィンランドでは、二〇〇一年から〇四年にかけて新聞雑誌協会、教員組合、図書館協会が一体になって、子どもたちの読書力の向上に努めました。具体的には、公共図書館の増設、学校図書館の充実、自治体と図書館の連携強化などです。注目すべきことは、このために授業時間を増やしていないということです。中学の授業時間は、OECD諸国の中で最少です。

〇一年に成立した「子どもの読書活動の推進に関する法律」や、七月に成立した「文字・活字文化振興法」では、公立図書館と学校図書館の整備・充実が強くうたわれました。しかしわが国の公立図書館の水準は、いまだに先進諸国の中で最低水準にあります。子どもたちの未来のために、欧米先進国レベルの強力な図書館政策が必要とされます。

（日本図書館協会理事）